

参
河
記

上
中
下

抑源朝臣前大相国家康公と申奉る八三州岡崎の
城主徳川清康の御孫、廣忠の御子也、御稚名竹千代君
と申奉る

或書ニ曰竹千代君の御先祖新田の一族也、芟田三
郎

満義の長男義秋

建武の乱の後に流浪となり給ひてより西三河酒井の
郷、其後松平の郷に年久しく忍ひて住給ふ、義秋かひく
敷おはして年々月々に大地を開キ人民をなつけ
大相国と九代の内三州居住をなし今大相国公天下

を安リ治給ふ也、其九代は

義秋 後親氏と改 泰親 信光 親忠 長親

信忠 清康 廣忠 家康公也

御母八苅屋(刈谷)の城主水野右衛門太夫忠政の娘同下野守信光

の為に八妹の御子也

或書曰、実八江州三福寺青木氏の女の腹也、水野氏八

養母也ト云

(一五四二年)
天文十一 壬寅十二月廿六日に誕生し給ふと云々

天文十二年 癸卯竹千代君二歳の御時、母堂を廣忠公離別

し給ふ、苅屋へおくりて後、田原の城主戸田弾正少弼聳に成セ給ふ也、其頃尾州より織田弾正忠西三河へ発向して岡崎に向て諸所に捕出をかまへ取詰ける程に岡崎一城に成、是に依て廣忠より駿河今川殿へ加勢をこわせ給へ八加勢の事八安キ儀也、乍去人質を給八り御得と有けれ八さらはとて同六年^(十脱)丁未竹千代君六歳の御時、駿河へ御下向に極り西の郡にて舩にめし、田原へあかせたま八駿河へ御返りの所を廣忠の舅戸田弾正少弼竹千代君の御為に八まゝ祖父のけなる子細か有けん、竹千代君を奪取て尾州の

織田弾正方へ永楽十貫に奉売故に贄囚名護屋にて
三年を送らせ給ふ、今川殿仰ける八廣忠より人質きた
れ共脇より奪取事八是非なし、其上廣忠織田と一味
にてなき事なき八尤加勢有へしとて数百加勢仕給ふに
付廣忠毎度敵国と戦ひ給ふとなり 同十八年 巳 丙

竹千代君八歳に成せ給ふ時、三月六日御父廣忠病死給ふ也

去程に上州祥の城を八尾州織田弾正信秀切り捕て彼城

に八嫡子織田三郎五郎信廣を

信長公舎たん
後号大隅守

置給ふ所に今川殿

より駿河遠江三河三ヶ国の人数を促して彼城へ押寄給ふ

て七重八重に取巻責ける程に父信秀方よりあつかいを入ル

時、竹千代君と三郎五郎殿八人質かへに成て同十九年庚戌

竹千代君九歳の御時より駿河へ御下向有し少将宮町天野

三郎・上田慶宗所に御座まし十九歳までうき苦勞を被成

ける、其時岡崎の城代に八石川右近・阿部大蔵大夫兩人惣奉行八

鳥井伊賀守・松平次郎右衛門兩人の御死去わ後八駿河より

番手の衆を入置て本主の竹千代君へ八纒に御扶持方

計りあてかい三州の所務とて八少も不渡今川家へ押領

仕給ふ、故御台所つゝかす就中竹千代君御衣服をも召

替させ給ふへきやうもなし、中々諸事御不自由なる次第也、去共御譜代の宿老鳥居伊賀守八其身有徳に有けれ八御衣并厨料等皆々此伊賀守調進して御忠節他にことなり、急而岡崎の若奉行の事なれ八今川家へ忍ひて岡崎の御蔵へ兵糧数多せ詰置て其後岡崎へ御馬を寄せ給ひし時若の御手を引て見せ奉某老駿の役にかやうに仕置申なり侍数多扶持させ給うふて方々切捕御手をひろけ御名をあけさせ給ふへし某既ニ八旬に餘り露命たもち一度若の

此城の主共ならせ給八んを見奉らん事生前の大慶成ル
へしと老眼より涙をなかして申上げれ八若も御涙を
うかへさせ給ふて有かたし、各御譜代衆岡崎に残居て
手作をし其身妻子を養十余年の春秋を送り
けるこそ久しけれ其間に竹千代君御元服有義元と
元と云字を請させ給ひ御名松平次郎三郎蔵人元康
と申奉る、(一五五八年)永禄元年戊午元康十七の御年大高の城江
兵糧入を請とらせたまひ夫と岡崎へうち入せ給ひしばらく
有て駿河へかへらせ給ふ也

此時岡崎ニて小セリ合共有り、寺辺・梅ヶ壺・廣瀬・衣の城等也
元康の御働を見奉り御譜代衆悦事不斜と云也

同三年庚申元康十九の御年今川殿尾州へ発向し給ふ
信長大高の城に向て取出をかかへ佐久間大学守りて持
居けるを元康に打崩し給へと有りけれ八早速取詰佐久
間を討捕給ひける右より大高の城主鵜殿長門を入置
たる八永々在番成により元康を替に入置給ふ、鳴海・くつ
かけ・大高の城へも兵糧入させ、明日清洲へ打入らんと五月十
五日桶狭間山のふもとにて兵糧つかわせ給ふ、惣勢も思ひ

くゝに五十騎百騎所々に打よりくゝ腰飯をつかいたる処に
俄に大風大雨順降して前後も見へさる折節に信長千余
騎にて打寄せ切くふ懸り給へ八義元備を直
さんと仕給ふに人数散々に成て敗軍する
議元腹をきらぬと仕給ふを森新介と
名乗り走り懸りかゝ義元を打奉り首をとり
大将うたれたまへ八諸軍敗北たり、急而元康
は大高の城番手の事なれ八宿走られ各打寄諫
申八義元打れ給ふよし其ゆへあるなれ八此城を

引取可然と申上げれ八元康曰フハ縦義元討れ給ふ
事必定也と言共其儀何れよりなり共味方の内
にたる惶成告なしさもなきにおゐて時を作り城を
明引退もし義元討死いつわりた^ヒならハ義元へ
面をむけんやうもなし、世の嘲後代の悪名かはねの上恥辱
成へし、惶成一左右あくね間八全く立退間敷とのたまいて
浅井六之助と申者を信長の陳へ物見に越給ふ処に又信長
の御内に梶川平七と申者元康に志^{コ、ロ}しふかきもの有しか
彼者のかたより信長大高の城へ人数を指向給八んと評定

有ル中伺進の為にしのひて飛札越ける所にみちにて浅井
行逢たり何もものそときひしく責けれはしかくの使の
よし申に依て其状を披見して其者を八夫と通し六之助八
とつて帰り此由を申上げれ八各家老衆打寄て其儀なら八
早く宵の内に御引取か然と申上る、元康公の給ふ八宵の間八
闇にて行ききくらく前後そろいかたし、今少彼月出て
より引退へし、若其内に敵寄せ来ら八此城を枕として
打果すへしとて少もさわき給八す各是非と諫申けれ共
御用ひなく終に月出より引取せ給ふなり、俄に能静まらせ

給ふ、大将かなと後におもい語り兎かくて雑兵千余計にて前
後こゝろもひとつにして落行ク処に落勢留よとて苅屋方
三百人計押出シ待居ける処へ希なる勢はやとてきり行掛る
是八味方とたかいに矢をはけ鉄砲の火繩をはさみ用心する
処に苅屋衆に上田平云と言者真先に通り来リ浅井六之助
出あひて元康にて渡らせ給はし相違なく通し申さんとて
今道までおくり奉れは無恙大樹寺へ引入せ給ふ、去程二
駿河方の番手の衆岡崎の城を捨て引退故に明城となり
ければ同五月三日大樹寺方岡崎の城へ移給ふ、各御譜代の

老若不残馳集て悦事限なし、其^方元康を改徳川三河守
家康と申奉る、同四年辛^丙家康公廿歳の御歳三州の内
廣瀬・梅ヶ壺・小川・石^か瀬寺の辺^苅屋十八町・長沢・戸屋・金谷^二而
取合責戦ひ御苦勞有也、両吉郎の屋形をもしたかへさせ給イ
西尾東條治る忠かたの原八小笠原新九郎味方申て是八御手
に入也、其の後信長と和解有て其上に信長公の御息女を家康公
の御惣領竹千代君と御縁辺也、御契約にて楽に御加勢有之
也、信長公の凡天下を誠給ふ事八辰^方午の年十五年の間也、同
六年癸^亥家康公廿二の御時三州に一向宗一揆か起、是八野寺

の内にいたつら者有しを酒井雅楽頭寺中へ押込せんさくをとくるに依て也、其時味方申たる衆八上野城主酒井将監御一門には桜井城主松平監物家継其外佐崎寺の御坊八丁寺の内就間・針崎の寺門氏寺の旦那共御近習外控の者共とも其宵と八相勤居けるか明ル卯ノ刻ニ八一里半余の所なればやすくとたち退て思ひくりに彼寺中へ馳集ル去程に岡崎より一里南に上和田と言村有、この所に大久保五郎右衛門城有、彼一族三十六人然寄て戦ひ有たり、上和田より渡路針崎へ八わつか廿四五町の間也、針崎の寺内より花房蜂屋大将二而七八百人にて岡崎へ働所を上和田二而押へ日々小せり合戦ひ終ル間

もなく就中子ノ正月十一日ニ八はけしき取合有りて上和田のヒ
城戸口までてき押詰て大久保五郎右衛門・同七郎右衛門兩人共眼を射られ
其外数每手負けれとも一族共相集一人ものかすして防ぎ戦
所に上和田と岡崎との間六名と言所方大屋甚内・筒井甚六を先と
して拾騎計諸鎧を合せて馳来、是に刀を持って城戸口より追返シ
針崎野にて追払へ八また針崎方あら手のものとも十騎計出
向ふ処に家康公馳つかせ給ふ、自御馬の上に鎧を提させ
給ひて御馬もつゝかさる処に宇津与五郎馳付御馬の口に
付返いり返込シ御下知し給ふ所に蜂屋つゝて返り奉ル

を御目を見出し大希声にていかりせ給へ八御譜代のも (破損)

やさしさ八御声ニヲにとるき恐き日頃八一騎当千の勇 (破損)

なれとも鎧ヲ引弱くと迎る、爰に大屋長吉と言者 (破損)

も一向宗にて有けれとも主君の恩にかえ何そ宗門に同 (破損)

せんやとて御味方申此時鉄砲ニて真たゝ中を打ぬかれた

り洲上和田の城へかき入れ八家康公も彼城へ御引有て

大屋か手を御取御手の上に置せ給ひて最後をおしませ

給ふそ有かたき大屋行年廿三ニて死ス、家康公岡崎の城江

歸り入せ給ふて御鎧をぬかせ給へ八矢の破数多有けれ共御運

のつよき大将のめされたる御物具ためしなれば御身にあたらす
あやうかりし事共也、其日半時計たゝかい有てあい引に退也
味方も大屋を初て能侍四人打死ス、大将御手を出つさせ給へ八
敵に首を取れず敵方ニ八久世平四郎を初として十余
人うたれたり、同廿五日の夜深津八九郎責た虎之介兩人佐崎江
忍ひ入寺内を焼払八んと申てひそかに出ける所に御方之内
に敵地へ内返するもの有也、太田一族かへりふして右兩人
打ころす、家康公八二人の者思ひ入八乗入給八んと思召人数を
分、夜の明ルを満たせ給へ八夜明て敵方に彼兩人の首を差

上ケテ^{ヨハ}りけれ八力及はセ給八す引入セ給ふ也、二月八日二八西尾の城へ兵糧入御働有、直に行八三里の道なれ共桜井・小川の寺八丁と敵地なれ八苅鳥の水野下野守殿を加勢に御たのみ有て二千計の人数にて西の野へ押出して六里の道をま八かて入セ給八御歸りに八御働有之也、三月八日二八八丁へ御馬を寄セ給いて寺中押込大将とかせく高橋小太夫を天野三郎兵衛討取、小野下総守手へ八榎津塚の両寺中^方したいける所也、取て歸シ半里か間を追討ニて大将鈴木弥兵衛を苅屋衆上田平云か討取ル其外五六十人討取たり、かくて後語に吉田右左衛門と言者有

けり、味方申一族方の本多をかたらい調儀を舟合て石川の一族を渡路討入一時に焼払ふ故に一族の衆皆針崎の寺中へ悉ク敗北して降参する、此あき寺門の落坊主衆を八国を追払イ給ふ、故におもひ／＼に他国してけり、凡永禄六癸亥十一月此一族発り明ル年甲子三月治ル一向宗憲法度被仰付小寺迄追放有の諸侍二八起債をかゝせ給いて赦免有の召出さるゝ最も有又牢人するも有り、けうに早速静る事八伯父にて御座ス水野下野守殿御加勢故也、去程に上野の城へ八取出をさせ給いて水野三左衛門・同四郎右衛門に人数を相添彼城を取巻

城方外へ八一人も出さず、酒井将監八蜜に城より忍び出駿河へ
落行と云々

同九年丙寅家康公叙従五位下任三河守ト云々

同十年丁卯家康公廿六東三河へ御手つかい有て西の敵鵜殿

長門を討取子共二人生捕也、其後今川氏真を鵜殿か子共二人

と家康公の御嫡男駿府に置奉る竹千代君とかへ合との給ふ、故

人質替に成て取替させ給ふ也、岡崎の城に御座ます故後

に八岡崎二郎三郎信康と申奉る、御母方八今川家関口形部息(刑)

女也、去程に駿河スルと御手切に成て一ノ宮に取手をかまへ給ふ

所に氏真駿河遠江両国の人数を引率々一万余騎にて発
向有て牛窪に陣を取給ひて先衆一ノ宮を責る時追払ひて
敵陣八幡と佐脇との間花野か原へ押出して、其夜八取出に
御陣を取給ひ、翌日卒の道をおして返らせ給へと氏真出給八
さる故夫を御馬入の其後八幡牛窪の敵と佐野にてセリ合有て
追崩敵数多討捕引入給ふ、又八幡へ御働セリ合有し八幡佐脇の
取出もこらへすして明ヶ退也、牛窪の牧野新九郎・野田の菅沼
新八郎も味方申セは田原八戸田吉兵衛也、下町村の向井か人質を
すて、味方申故に則御手に入り吉田の城も明ヶ渡ス長篠菅

沼伊豆・筑手奥平道文・(作)たみねの菅沼新三郎も降参申也

其後下地御働有也、駿河衆とセリ合有の時本多平八後号中務・牧野

惣二郎等鎧を合に蜂谷半之丞討死する、其年東三河不残治ル

也、其後甲斐の信玄と御約束有て家康公ニ八遠州を川切に

取セ給へし、信玄八駿州の里取申と宜ひ合せられ両所へ御出

馬也、去程に家康公八井谷の三人衆菅沼二郎右衛門・近藤平右衛門

後号石見守御案内申て遠州表へ打出給へ八久野二俣も御手につくひ

ら塚の小笠原というも御方ニ参、此時見付国府ニて甲州家の

侍大将秋山伯耆守を押し括わせ給ふ、急而大井川切と定候処に

狼藉の出張と云々、去程二同十一月二八遠州も大かたしたかいさせ給ふ、同十二年巳家康公廿八の時今川氏真八駿州を信玄二取れ朝比奈備中守か懸(掛)川の城へ籠給ふ処に家康公押寄給ひて大玉山のかまえを取入りはけしき戦ひ有て氏真一騎当千と頼まれたる伊藤武兵衛大膳なとゝ言ものともを討捕也、其後あつかい二成て氏真八北條氏康の智なれは小田原へ退給ふ也、同三月堀川に不意に一族起と言共押て乗崩給ふ也、御馬入也

其わ後遠州濱(浜)松を御居住と宗(定)め取立させ給ふ也、元龜元年午公廿九の御時二月金ヶ崎御勢有て其後越前衆北通口へ

出張する故信長^{ナカ}公馳向はセ給ふ時大切の御一戦と有て自公
五千余騎にて御加勢也、六月廿八日姉川におゐて合戦有、信長公
の先陣戦利なふして浅井につき立られ敗軍する所に公
そなへをもたさす五千余騎を前後に立、無二無三につき入給へ八
朝倉加勢しはしさゝへたゝかひけるか終にこらへすして恙敗
軍する木の本まで追討千五百余人の首をとらせ給へ八信長公
大きに勝利を得給ふて今度江北出陣におゐて抜卒の玉切
城に十高祖百張良勢切登言共同日に一百語当家の網紀武
門の棟梁たるへしと有、御感書を送らせ給ふ也、同十一月越前衆

出張して比叡山に陣を取、信長公八志賀の方に陣取給ふ、此時八酒井左衛門尉忠次・石川日向守家成両大将として三千余騎信長江御加勢也

同二年辛未公世の御歳、信長公上落の時御加勢の為松平勘四郎

信一後号伊豆守諸家中より人数を出し合せ附させ給ひつかわされ

たり、此時箕作の城主を勘四郎信一手にて乗取也、去程二

信玄八急而遠州を八天龍川切りとこそ定申所に此度

家康公大井川切とのたまふ事心得すとて東三河発向して足助の城取懸ヶ責給ふ、故に鈴木氏城を渡して

降参する、吉田・二連木迄働給ふニ付(作手)つくて・(田峯)たみね・長篠も

山我三方を持居けるか是も信長へしたかいける家康公
五千余騎ニて馳向ひ給ひて吉田の町口ニてセリ合有て
各鎧を合する也、其より信長八長沢・牛窪・設楽筋へ
働引入給ふ也

同三年壬申家康公世一信長遠州へ出張て東原・西崎を
取、味方の衆各見付の原へ打出ける所に甲州勢急に
押懸頻にしたかい付て引取事難成に及ふ処に本多
平八郎忠勝敵味方の中へ乗入身命をかへりみす諸軍勢

をたつさえて引込たり、此時敵方にて家康に過たるもの
か二ツ有(唐)かう(頭)のかしらに本多平八と狂歌をよむ也

去程ニ信玄八二俣の城へ押寄て水の手をとむ也、城代
青木又四郎・中根平左衛門不叶城を渡して引退也、其より
信玄八濱松より北大菩薩をさかへて押返し見給ふ処に
家康公後備に足輕を懸ケて喰留んと仕給ふによつて
信玄取て返し味方ヶ原におゐて二万五千の人数を三
手に備給ふ所に家康公一万計の御人数を十二三段に立
押向セ給へ八御備先一番合戦本多平八郎・榊原小平太

後号式部
少輔政康卜

・鳥井彦右衛門・松平甚太郎・小笠原与八郎五頭を以テ信

玄の旗本 切手押懸りければ信玄さいを取、太鼓をうち
静に押向ふ、家康公も再拜を振て懸入給へ八諸卒共に
命をかきりに一時計責戦ひ一人当千の者共大かい討死
することわりなる哉三万に及ふ大敵に儻一万にたらさる
味方を以テ入替勢わなし、終に戦ひやふれ悉ク敗軍する
敵八勝に乗て追かくる落行味方をのはさんと鳥井
彦右衛門まこめたてとつて返し身命を捨て防戦ふ所に
信玄の旗本より放つ矢にくらの前輪の内よりはかま

所を射られ引退也、家康公取て返し心能今一軍して討はたすへきとのたまひ御馬を返させたまふ処に夏目次郎右衛門御馬の口に取付て大将八命たもち給へ八世に出るためし古今其所々多し、異国本朝の文にも見へたりと申て御馬の口を引直し鑑の石討にて御馬を打けれ八元来御馬八逸物也、そのまゝかけ出浜松さしてのかせ給ふ也夫より次郎右衛門取て返し思程防き戦討死ス、寔に一騎当千の勇士忠義の兵と八かれらをや可申、此時浜松の城内さわき立て静まらず、いかんせんと思召処に高木

九助退くちにて坊主首を取て切先につらぬき見せ奉れは神妙にも仕けり、其首を城内持廻り信玄を討たるよし、能きかせよと有ければ畏て候とて到高声に能まはる城内悦の色の見へて静りける良持はかり事八かくこそ有へき事なれと皆々奉感、其後遠州に不作して知行物成納まらず、麦・ひえを上食とす味方討死八鳥井四郎左衛門尉・本多肥後・榊原撰津・松平弥右衛門等始として凡六百余騎討死する、信長と加勢の平手も打死する、浜松の町中大形不残焼けれ八皆城へ取籠ル

去程に信玄八味方ヶ原に陣取て首とも実検して備たり
扱又浜松の城ちかくに下たれ(垂)と言町有、此町と味方ヶ原
の間八七八町の堤有、西八ふけ、東八次田也、彼堤町の間二
敵ふせきの城戸有、おくの山添を東三河野田郷へ出張
してかの城を数日の間にせめ落し城代菅沼新八郎并
加勢の松平与市忠正とつくて(作手)の松平・長篠の菅沼・(田峯)たみね
の菅沼三人の人質と替合に成て菅沼新八郎・松平与市も
引取也、かくて信玄遠州に依て夫より引入給ひ、其後発向
してまつ濃州岩村の城をせめ取て東三河迄出張して

病氣再発仕けれ八打手のほり給ふ事叶す、甲府へ引取
給ふとて根羽を煩おもりて駒場といふ処にて四月十二日二行年
五十三にて病死也

其年天正元癸丙六月家康公廿二長篠の城へ取懸り責さ

セ給へ八城を明渡し退に依て是を請取らせ普請等被仰

付出かせ給ふ所に翌年奥平奥州入道・同美濃守父子人

質を捨御方申に依て嫡孫九八郎家昌後二号
美濃守家康公賀

になされて奥平父子ニ此城を預け置せ給ふ也、是に戊ノ年を

思此去程に甲州武田孫六入道号道
遥軒・穴山梅雪大将ニて遠州

もかへ発向して所々放火して焼働に依て家康公馳向との給本多平八郎・榊原小平太・本多作右衛門重次等をさし向追払数多討取セ給ふ也、其後勝頼遠州表へ発向して久野懸川へ働国中江押て放火して天龍川の上の瀬を越、浜松迄働、まこめの川を渡てかり田をし足輕をかけてひき上真田か原に陳取、夫方諏訪の原に城をかまへ、勝頼引入給ふ、其後家康公再信康十五歳の御時初陣として御父子共に足助へ御働有て其比足助布施八甲州江したかいたるに依て也、早速城を渡し退也、同二年申戊四月家康公卅三乾へ御働有して引取らせ給ふ、時田の大久保村にて

御跡備へ敵したふに依て味方の若き衆少々討死する也、同年勝頼高天神の城へ取懸責給ふ、故に信長公も家康公の御加勢の為五千余騎を引卒して御出馬有て遠州塩見坂につかセ給所に城代小笠原与八郎降参して城を渡し勝頼の手に属する依テ信長公其方引返し給ふ也、信長公御憤源して甲州亡て以後小笠原与八郎小田原へ追けるを氏真再三ノ御取望有て終に与八郎を小田原にて切腹させ首を家康公へ送り給ふ也同三年乙亥家康公廿四の御歳に御譜代久藤中間に大岡弥四郎と言もの有、奥郡代官をさせ置給ふ処に富貴にして栄尤

のあまり逆心を全テ爰かしこの悪党をかり集て先足助の
城をしのひ取て勝頼を岡崎へ引入ンと調儀する処にと党の
内より山内八蔵と言ものうらかへり逆心あらはれ彼弥四郎父
子夫婦以上八人からめ取はりつけに懸ヶさせ、其外同類不
残御成敗有て当人弥四郎を八浜松岡崎引渡し岡崎
て四辻に首きりまて堀うつめ竹のこきりにて往来の者
共に三日さらしてひかせらるゝ其時勝頼八二万余騎を
引卒々布那迄出張有、調儀あらハれはかりこと相違仕
けれハ其より二連木へ働き給ふ、家康公ハ吉田へ御馬を向

給ふ、信康公八山中の法蔵寺に御馬を立給ふてはちかみ
原にてはけしき足輕セリ合有て勝頼引あけ長篠^{シノ}へ
押立つて奥平父子の立籠たる城郭を七重八重に取巻
て息をもつかせず責給ふ、此時城より鳥井強^{タウ}右衛門と
言もの忍ひ出て城中兵糧つきて難儀に及よし、信長・
家康へ申上又城中へ入るときとらわれたる、勝頼宣ふ八後詰
なきと申ならば命を助て能にとりたつへきとあり
けれ八畏候といふ、さら八とて城の城戸口へ人を付て越ける
其時城に向て言ける八鳥井こそ帰りたれ信長・家康

一兩日に後詰有は堅固に持こたへにて高らかに申けれ八
頓而首をは切られたる、かくて信長公御父子八十余騎
家康公御父子八一万余騎にて後詰也、家康公御父子八野
田へ押寄給へ八信長公八岡崎、信忠八八幡につかせ給ふ、先衆八
一野宮本野原ニ完満シウマンしたり、去程に五月廿一日に八信長公・家康
公御父子数万騎を引卒(有海)あるみか原へ押出させ給ひて勝
頼強敵の破敵なれはかゝりて一戦あるへき戦場の前にさ
くをつけたし堀ほらせ五十間三十間一ツ宛虎口を明ケ鉄砲を
仕かけねかけ給ふ、案のことく勝頼八家老のいさめも不用メ

長篠の堀のおさへとひかすにも人数を残しわつか四五手にて
龍川の石橋を押越て一騎うちの所を一里半おしかけ
合戦也、此時酒井左衛門尉武功を以テ蜜にとひかすへ押上
武田勢を追崩悉く討取也、去程に家康公御手にて
大久保七郎右衛門忠世・同次右衛門忠佐・内藤三左衛門信成・同四郎左衛門
正成・渡邊半蔵守綱・同半十郎等足輕を出してあひしらい
敵懸れ八柵ノ木の内へ引入鉄砲を以テ打立たれ八敵兵多ク
討死する、手負を助て引退けは打テ出て是を取懸走
出下知したり、敵五六度迄入替く押寄て戦たりしか

信長公三千挺の鉄砲に打立られ一度も勝利なかりけり
敵方の士大将真田を八渡邊半十郎是を討取勝頼の舎
弟望月の城主を八鳥井彦右衛門手にて長田蘇之助と言者
組討にして首を取、尾州衆には佐久間右衛門・龍川左近
ひるめて二手に柴田・木下ついで出追崩せは敵悉ク敗北
して追討に討程に鳳来寺辺迄追懸て七千余人
の首を取、此時信長公甲州迄乱入給八、甲府八言に及八
す信濃の両国までも同時に治るへきを勝て甲の緒
をしめよとのたまいて信長公引入歸らせ給ふ、故家康公も

御帰陣也、去程に家康公八六月上旬に諏訪の原の城
押置セ給ひて駿州上野原迄焼働してふんとうせさ
せて引取給ふ也、其時鳥井彦右衛門諏訪の原の城の乗
気うかかわんとて城の辺へ馬を乗寄せける所に彦右衛門尉
か狸之皮の拝織を敵見知て鉄砲を集打懸ヶけれ彦右衛門
腰着の軍敗団(配)に二ツ脇着に一ツ玉とまりて、其後又もゝに
当りて馬より落ル処を杉浦藤八郎走よりて引かけのく
故に彦右衛門命助かる、彦右衛門夫方ちんばに成ル、去程ニ家康
公同月下旬に八二俣の城の押へに大久保七郎右衛門を見、奈原

の取出に置セ給ひて諏訪の原の城へ取懸ケ七十日余リ責
させ給ひて終に責落して直に小山の城へ押寄責給ふ
処に勝頼二万五千の人数を引卒メ伊郎瀬迄後詰也
其時家康公小山の城を登不くして釜塚原を直に諏
訪の原へ引退かんと宣ふ処に酒井左衛門尉申敵に向わせ給ひ
伊郎へかゝり是非引セ給勝頼長篠にておくれの以後なれハ
中々懸て一戦ハ必なる間敷と左衛門尉申上ルに依て家康公
尤と宣ひ伊郎川かゝりて退セ給ふ、マコト誠マコトに左衛門尉つも
りのことく此度長篠にて能者不残討死して方々取集

勢の事なれ八勝頼軍なふして相引也、其年二保の城を八依田右衛門是を守る、大久保七郎右衛門に渡し退高明の城へ八家康公御出馬有て追手二王堂へ八本多平八郎・榊原小平太を着向はせ給ふて御旗本八横川へ移らせ給ひ加々見山へ押上てからめてる城中へ責入に依て城主朝比奈又太郎叶わつして降参し御手にする也

同四年丙子家康公卅五、山西麦苅捨させ給ひて乾へ御働有、あつき坂へ押寄給へ八天野宮内左衛門塩見坂を持かため居たり、大久保七郎右衛門を石かみ手へ押上けれ八宮内左衛門かな

わす、あつき坂・塩見坂を上て鹿かはれ江退也、八月勝頼高
天神瀧坂へ兵糧入に出張して国安ト言処に陳取、家康公国中へ
押出し合戦を急給へしとてたかひに陣を取給ふ也、信康公八
懸川に陣取給ふ所に勝頼国安ト引入給ふ、故に軍なし、其
年横須賀の城を取立給ふ、大須賀五郎右衛門を城代に置給ふ也
同五年丁丑家康公廿六、八月勝頼二万計の人数ニて横須賀ト
南辺の尾崎迄働浜辺に陣取也、家康公御父子共に横須
賀の城より四町計北なる丸山に御旗を立諸勢八濱松へ押
出し備たり、敵あひ三町計り隔其中に入江有てに楽に

鉄砲をうち合たる計也、其時信康八鈴木長兵衛と言者
一人召れ給ひて勝頼の旗の立たる所より二町計近ク乗
寄物見を仕給ひ家康公へ御合戦在し可然は被仰上ければ
家康公宣ふ八敵八大軍味方八小勢なるに切所をかまへさる手たて
もなくして懸合の軍勝利有へからすとて御合戦なし、各
功者衆の申けるは大殿二八三方ヶ原の御合戦にて能御功者になら
せ給ふと感申也

同六年 戌寅 家康公廿七、西山高天神へ麦苗蒔捨に御働有て
八月八家康公御父子共に西にて蒔田をさせ諏訪原の城へ兵糧

入させ給ふ也

同七年巳卯家康公世八又西山へ麦苅捨の御働有、其年信康公八家康公の御意にそむき給ふ、其子細八万事御心まゝにして御行僧徒に過たり、家康公御異見をも用ひ給八すして御氣植を行八せ給ひ家老衆の諫言をも猶以御取あけなきに依て各讒言して勝頼と御内通有て逆心のよし申上ル故家康公御はら立尋常ならず、子の身として父に弓を引と言事前代未聞の次第也とて岡崎の城方出したまひて大濱へ移し堀江の城へ御越有し二俣の城へ移したまひて服部

半蔵・天方山城兩人被仰付御生害也、信康の給ひける八父に弓を引と言事まつたく偽也、年寄共の讒言是非なしされとも此上八兎角申上ニ不及とて二人女子の御事、御菩提八大樹寺を頼むへきよし被仰置、城代大久保一類其外御した志^シみ申たる者までも御形見をくらせ給ひて念佛となへ御はら十文字にかき切らせ腹部に介錯せよとの給へ八三代相忠の御事なき八半蔵刀を捨落洩するはやくと宣ふにちから及はず遠州の住人天方山城なくく介錯仕奉る、家康公も入口のさしえに依て不慮の殺客と御後悔の御伺度々有し也

去程に九月十五日山西へ御働有て持宗の城を責落して三浦
兵部・向井伊賀守父子を討取とうめに陣を取給ふ処に勝頼
八戦敵の北條を捨急馳向給ふ処に富士川の水満して越事
ならず、川ナりに馬を立給ふ間に家康公夫方早速諏訪原
の城へ引入給へ八勝頼八田崎の城へ入給ふ故軍八なし、夫方も勝頼八引
入る也、同八年庚辰家康公廿九、二月高天神へ御馬を出され相
坂中村に取出をかまへさせ給也、又六月高天神へ御出馬有て
鹿かは をかりす取出をかまへ給ふ、此外小笠原の取出を八其所二
取セ給ふ也、かくて十月家康公高天神へ押寄させ給ひて横

須賀を御旗本として御譜代の大将衆酒井・石川・大須賀・本
多・榊原・平岩・鳥井・水野・大久保・松平・内藤・牧野・植木・三宅・戸田等
を初として其外遠州三河の諸將を以テ各城を取迫し四方
に堀をほり柵をつけ明る、午ノ三月迄百七十余日責給ふ、城中
に八兵糧米もいゝかねは忍ひく城を_ら出わらひところをほり
せりあかさをつみて糧とし虎口をかため油断なく城を八
堅固に持といへとも後詰の頼みあらされは城中番手軍言
とも岡部丹波・横田甚五郎_{後号} 相木栗田孕石を双として其
_{甚右衛門}
外内使して明日巳ノ三月廿一日の宵過て城中の兵とも石川

長門守・大久保七郎右衛門持口へ両手二分て切て出討死する番手の
双岡部丹波を八大久保七郎右衛門手にて本多主水と言者首を取
横田相木八つゝかなく切ぬけり、孕石主水八生捕に成ル、其外の者共
爰かしこにて押詰追懸首を取、諸手へ討取首数六百八十四人
同九年辛巳五月家康公四十の御歳に八田部とうめへ麦田苅捨に
御働有て伊郎瀬をのき給ふ処にもちむねの城より朝比奈駿河守
か手の者ともつきしたかひける処に御方ニ八石川伯耆守・平岩
七之助・鳥井彦右衛門・内藤弥次右衛門・酒井与九郎・松平源次郎・足助
小笠原とつて返し城際まで追討にし能大将とも五十三人

まで討死なり

天正十年壬午家康公四十一、武田一家穴山梅雪齋後号玄蕃
信行也御方

申さるゝに依て家康公濱松より駿河路を甲州へ打入せ給ふ時
各行軍有、田中の城にて芦田有て城中より足輕を出してつけ
らるゝに取て歸し城へ引あくる時兵鉄砲を打懸かひ当たる
処に鳥井彦右衛門馬を城辺に馳おもむき軍勢たつさへて
引退たり、持宗の城八朝比奈守の鞠子の城八屋代有て、其外
久野山山の城等押寄く取巻くければ或八降参り明渡シなり

去程に穴山江尻の城を出上の原において家康公にたいめん仕給へは穴山衆先手として甲府へ入、市川に御陣を取給ふ其時信長公木曾よし政御方申されける故安土より信列木曾路を伊奈へ懸り打入給ひて諏訪に御馬立也、仁科五郎信成并小山田備中守等責ころさる、去程に勝頼八三万計の人数にて初め諏訪へ出張々合戦評定仕給ふ処に信長・家康公両江うち入給ふ、其上穴山を初め一家譜代衆ことく逆心なれば甲信両国さわき立て子をさかさまにおひ山ニ入れれ八打集ル数万騎の者共も父母妻子をしりはくるとて大かた落

散たり、かくて八合戦叶へからずとて勝頼新府へ引給へは弥勢
八落らせぬ、新府城未普債中半にしてふせき矢射へき失念も
なければたて籠る事あたハす、小山田兵衛尉を頼みとして
岩取の城へたて籠んとて郡内へ退給へは信茂たちまち逆
心々相待の主君に向て弓鉄砲打かけければ是も叶はす
して天目山へ入らんとて落行給へは家臣甘利甚五郎・大熊新
左衛門知平しらと兩人かくれ居て是等も前心々矢鉄砲を射
懸打かけ終に入奉らさる故に川原に並居て休給ふ処に信
長公と討手の衆瀧川左近将監・川尻肥前守等追懸ヶ押寄たり

去程に勝頼八土屋・小宮山を先として其外したかふ者共の防
矢射ケル、其隙に其身信勝父子夫婦枕をならへて自害した
給ふ処に土屋惣蔵介錯申念比にほり埋ミ女房達迄さし
殺し勝頼父子夫婦埋メ奉りし、其上ニ敷皮敷腹かき切て
伏ければ小宮山内膳を始として最後の供の衆百余人命
をかきりに戦ひ死ス、信長公甲府へ打入て武田一家譜代の
衆今度逆心仕たる者共大形残さず打殺さる、また恵林寺
僧申を山門へ追あけて下より火を懸国師知尚を初長老
僧児同宿百人余り焼殺さる、是八佐々木年禎の子息并

公方との使定福院大和淡路守信玄の時より甲府に詰けるを此度寺中にかくし置信長公より　々宣へとも出し給はさるに依て也、去程に信長公甲府において国割有て駿州八家康公へ進せらるゝ、并信州 諏訪ノ郡河尻肥前二信州の内 更級高井水内 埴科四郡八森勝蔵後号 武蔵守・伊奈郡盤毛ハ利河内守・上州并信州の内 佐久・小縣二郡瀧川左近将監・其上関東被住管領織(美濃方)澧州岩村の城五万石森乱丸・其外木曾殿、穴山殿へも本領の上御加忠有て後松平甚太郎後号 周防守を召出され永々諏訪の原の城代に有ても忠節不斜と宣て富士の根方川東を給て三枚橋の城代に被仰付也、去程二信長公

四月二日甲府を立駿河路を富士の根方へ御返有て遠三両州へ
かゝりて安土へ御帰陣也、五月家康公八梅雪齋御同道ニて安土
御見廻有信長公御馳走の為四座に御能被仰付御祝儀の御能
有て後信長公御父子家康公梅雪齋御同道ニて上洛有て
其上ニて家康公ニ八此次而ニ堺を見物可有とて御案内の為と
宣ひて信長公近習より長谷川竹千代後藤五郎東郷侍従秀一トつか八さるゝ
家康公梅雪齋打つれて堺へ越セ給ひし其内に明智日向守
光秀号惟任丹波一国江州志賀ノ郡領主逆心々本能寺へ押寄六月二日の朝、信長公
四十九歳、信忠廿七歳ニて奉討、其時光秀京ノ地子残よくゆるし

て諸町人などの礼を材木の上にて償けると云々

去程に家康公堺にて此由を聞召急御下向有、伊賀の国通らせ給へ八伊賀衆御馳走仕おくり奉る、勢州白子より御舩にめして尾州とこなゝの浦につき三州大濱江のほらせ給ひて永井新八郎真勝所にて御休息有、夫より西尾へ御つき浜松へ入せ給ふ也、抑今度伊賀衆御馳走仕奉る其もと八先年信長公伊州を切取て地衆をコトコト悉くなくて切にして他国仕たる者迄引戻し成敗し給ひし時、家康公御領国へもあまねく落来ル者をかへし置たまひて一人も出さすかゝへおかせ給ひしに依て其

一類共が残り居て此時御方申也、服部等是也、穴山梅雪内
心に家康公をもうたかいてはるかの御役を退き給ふゆへ
野伏共の手にかゝり打とられ給ふ也、かくて家康公大
浜にて本多百助を召てなんじ急而河尻肥前と八知音の
者也、急きて甲府に行て其辺の一揆等起りみたれ八
加勢をおくらんと可申とて越セ給ふ処に河尻 なしとて
百助もてなし、其夜蚊屋の内にて長刀にてさし殺ス、夫より
方々一揆起りて肥前守をも打殺ス、去程に其頃羽柴筑前
守秀吉八藝州毛利家と取合て備中国において

戦陣取て有けるか信長公奉害と聞、毛利家こと八りと談を入急ぎ馳のほり山崎につく処に明智二万余騎の人数を引卒々京都を打立て久我縄手を隔て陣を取秀吉分押寄たまへ八光秀八甥の明知左馬之介を大将として七千余騎をすゝめて一戦をはしむ、天下の安否此一戦にありと互ニ宋牌を振て責たゝかう、終に光秀懸ヶまけ、坂本へ退ける処を伏見と小栗橋との間に野伏のものゝ手にかゝり麻畑の中において同十一日惟任行年五十六にて被殺、家臣齊藤内蔵之助・明知庄兵衛をは

生捕て粟田口ニてはりつけに懸らるゝ敵を討取其
数一千五百余と云々

織田七兵衛尉信澄も光秀一身なれは大坂の城におゐて
織田三七郎信孝押寄て責殺さる、其時筒井順慶八
和州^を打て出宇治近辺に陣を取て天下の安否を
うかふ所に光秀打まけぬれは頓^而秀吉へ隨身する
去程に家康公八濱松ニて人数を揃へ尾州鳴海迄出馬
有てそれより引返し甲州へ打入給ふ也、御先手に八酒井
左衛門・大須賀五郎右衛門・大久保七郎右衛門・石川伯耆守・本多豊後

守・岡部次郎右衛門・穴山衆ノ信州諏訪郡おつこつ(乙骨)へ着陣
する、其頃信長家の侍大将瀧川左近将監一益八上州
苅田橋の城より北條氏真西山上野へ発向を追払八んと
て上武のさかい神各川へ出張して六月十八日北條衆と
合戦、打負ことくく敗北して箕輪の城へ引籠り同
廿日打立真田を頼み人質を取てうすいを越道に人質を
取かへく尾州までつゝかなかく退ク、此きほひに依て氏直
八甲州・信州の両国を治むへしとて五万余の大軍を卒して
是もおつこつへ出陣する家康公五万余騎懸合の軍

あやうして甲州新府の城江引入セ給ふ也、其時しつはらい
八岡部次郎右衛門、二二八穴山衆、三八大久保七郎右衛門、四八本多豊後守
五八石川長門守、六八大須賀五郎右衛門康高を先ニ立六手合テ
三千余の備にて五里の道を引取セ給ふ也、敵兵追懸
したふといへ共各武功ニ依て味方一人もうたせす、引退セ
給ひて其日ニ新府の城へ入セ給へ八氏直八わ(若神子)かみこに陣
を取、其間廿四町を隔テ中に大谷有衆軍八なし、七月より
十月迄百余日戦陣也、其頃甲州郡内へ八小田原領也、北条
左衛門佐を置給ふ、其時左衛門佐筒井ノ城主内藤を引

卒々八千余騎の人数を以て郡内より山返に東郡へ出て

所々放火する、然ルに鳥井彦右衛門・水野藤十郎後号日向守ト・松平玄蕃・

三宅惣右衛門を召、府中御留守におかせ給ふ処に是を聞

急馳向て北条左衛門佐か軍勢を見及れ八八千余味方八

讒に二千にたらず一戦あやうふおもふ処に鳥井彦右衛門備

より鈴木源助と言ものまつ先にすゝんてかけ入八鳥井

彦右衛門さいはいを振てそれうたすなつゝけものともと

下知して乗込八其手の軍兵共一四騎計一度にはつと

押かけをつ立る、是より諸勢我もくと押懸くと追くつ

す程敵ことくく敗北々三坂をさして逃のほる、追詰て
討程に敵の兵都合三百七十五人諸手へ討取、其首を新府
に渡して敵方の前ニ懸させ給へ八敵軍弥馬さわく也、其上
芦田真田一手ニ成て細井峠を取切と聞由、是八大久保七郎右衛門
計策して芦田をかたらい真田を引入御方にする也、芦田八
先年二侯の城を七郎右衛門ニ渡してのき、其後立満リて御方に
随ひ申所七郎右衛門取次を申上ルに付二重の知音ニて芦田一人
情を出すに哉、故に氏真こらへすしてあつかいを入和睦有て
甲州郡内と信州佐久・諏訪両郡を家康公へ渡し給ひて

家康公よりハ上州沼田を返し渡させ給へと有て、其上ニ氏直
八家康公の御贄に御縁組に定りて楽に御祝の為使氏真より
八八王子の城主北条陸奥守来る家康公甲州を治め給ひて
則郡内を鳥井彦右衛門ニ渡シ給ふ、是より彦右衛門八岩殿の城に
移り居る也、信州佐久郡八大久保七郎右衛門をつかわしめ給ひて御馬
入也、其時大久保七郎右衛門岩村田・小宝・望月・御山・岩瀬平・
柏木平・原田の口・平尾杯と言城有、あなこや屋敷構へ持たるに
身の地所ともをことくく引つけ御方にする、其節岩尾
の城を乗取とて芦田の依田右衛門・同源八兄弟共に討死する

是八年の歳の秋より申の年迄の間にかくのこことく、其外諏訪
下条大草等もうたかいて御方にする也

同十一年癸未家康公四十二、小田原御輿入也

同十二年甲申家康公四十三、秀吉との取合はじまる也、其(お)発八

秀吉光秀を討て後信雄卿北昌取立申さんと宣へは柴田中将

勝家八織田三七郎信孝を引たて申さんとて両方取合也、柴田八
越前ら起たつて出、柳ヶ瀬に陣を取、秀吉八押出し相陣を取

て足輕の懸合有也、此時加藤虎之介後号・同孫六後号・福嶋市松左馬之介

後号・糟谷介右衛門カス・片桐助作後号・平野権平後号・七人の衆遠江守・七人の衆左衛門大夫・七人の衆市正・七人の衆ト

合する、世人七本鎗と言也、其時前田又左衛門後任大納言
加賀守利家・木村五郎左衛門

長秀等別心によつて柴田打負、越前へ引入自害すれ八秀吉

岐阜の城へ押寄信孝を責落し野田の内海にて殺害ス、其

後八信雄をも矢な八んと仕給ひて信雄の家臣岡田長門守を

引付て逆心あらんにあてて八尾州を刻あたへんと朱印を出し

并津川玄蕃・浅井民弥等をも悉ク引つけ給ふ処にこのけい

さく顕れて岡田長門守を信雄江手打に仕給ふ也、同年三月

三日津川玄蕃甥州松ヶ崎
の城主也を飯田半兵衛にうたせ浅井民弥を八森

勘解由尾州苅田
安賀城主是を討、去程に岡田長門守領地大野とこなへに有

是を八信雄江家康公より清水捨之介・戸田三郎衛門兩人つか八

し請取セ給ふ也、本領星崎の城八岡田庄五郎後号伊勢守
長門守弟也・山口

半左衛門・長田弥左衛門・須賀太左衛門杯と言者籠居免を家康公

方酒井与四郎後号
雅楽頭・石川伯耆守・水野惣兵衛後号
和泉守・松平左近・内

藤弥右衛門等馳向て責けるに城中須賀太左衛門と名乗て城戸

を開き土橋を越、たゞ一人追出兔処に水野惣兵衛忠重手方

鈴木与八郎と名乗て同太左衛門と一番鎧を合せ免、次に都筑と

名乗て同太左衛門と二番を鎧合する、其方同勢押懸れは城中

のものとも太左衛門を討すへしとて丹羽五郎左衛門を初として我等

も／＼と大勢打テ出テセリ合たり、其時丹羽助左衛門も鎧を合せてたゞかい相引にしたり、其後十日計リ城を持こらへあつかいを入城を去り、後して岡田庄五郎八上方へ立退也、永田弥左衛門・須賀太左衛門・山口半左衛門八其俣尾州に置給ふ、家康公^{元の}布より信長公の御厚恩をたかへさせ給八すして信雄卿と御一和にて御加勢有同茲秀吉公十万騎を引卒メ尾州表江発向有、家康公八所々の押に御人数を差置セ給ひて一万五千余騎にて御加勢也先酒井左衛門尉を大将として五千余騎岩崎山へ押出し、同年三月廿五日に森武蔵守と一戦メ悉ク切崩し十二三町余追討ニ

して敵の兵廿四騎討取されとも武蔵守もさすかの勇士
なれ八岩崎二陣を取、左衛門尉八小牧近辺へ押而陣取、同廿八日二八
家康公信雄江も小牧山迄御旗を寄せ給へは秀吉公
十万余騎ニて犬山根城青塚近辺に陣取為ふ也、四月
九日には池田勝入父子・森武蔵守、大将二八三好孫七郎秀次
後号 数万騎を引く関白 三州へ発向して諸を取きり
岡崎迄焼払わんとして押出ス 家康公此由を聞キセ
給ひて旗をしほらせひそかに小牧山を出させ給ひて
勝川と言所にて御鎧を召され大須賀五郎右衛門・榊原

小平太・本多豊後守・水野惣兵衛・本多彦次郎・植村
庄五郎・丹羽勘助後式部少輔氏次を先陣として押むかわせ
給へは敵テキ八はや岩崎の城を取巻て辰の初刻より
巳の中刻半迄に責落す、城中二八丹羽次郎三郎を初
として相したかふ者共に源賀四郎右衛門・同六蔵
などと言りの兵を先として四十余人一人も不残討死ス
敵勝時を揚いふ勇進いふ爰に味方の先衆各押寄大将
秀次のひかへ給ふ旗本へ押寄切崩し追打にして首を
取り岩崎さして追詰たり、敵方には岩崎の城を責

取てきおひ居ける処なれ八何かわたためらふへき堀久太郎ホリ
秀政等一陣に進スんで大声を上ておしむかふ、敗北の敵
是を力として取て歸しければ御方押かエサレへされて小幡
をさして引退く、各宋拜を取て乗返カヘシ下知して引
退けれ共御方の軍兵二百余騎うたれたり 家康公
御旗本に八井伊万千代後号
兵部トを先として三千余騎
を出させ給へは池田勝入父子・森武蔵守大将として数
万騎にて押むかいたかひに備をよせ合、天地をうこかし
命を捨て戦ひける、去程に 家康公御旗本方水野

太郎作・大久保次右衛門・渡部^(辺)半蔵・酒井与四郎・加藤喜助・
森川金右衛門・高木九助・渡部^(辺)弥之助・神谷弥五郎・崎田
次兵衛此十人の者ともを頭に^ニして鉄砲二百挺相添て先手
の井伊万千代備へつか八し給へ八各馳向て入替へく打立
たり、御旗奉行笥勘右衛門・渡辺半十郎か御馬印を山
影より敵のうしろと見ゆる山上へ見すへして押あけ
たり、敵兵是を見てさわき立て見^エければ御方利を
得ておし懸り追崩、敵ことくく敗北する、松平金十郎・

鳥井新兵衛^{後号}左京之亮・同金次郎^{後号}四郎左衛門等鎧を合せて首を取、御馬

の返りに八内藤四郎左衛門・高木主水下知する、敵方の大将池田勝入を八永井右近直勝討取、同紀伊守を八安藤彦兵衛直次討取、森武蔵守を八本多八蔵首を取、半道はかり追討程に敵兵二千余人の首を討取、其時本多平八郎并石川長門守・松平上野守八小牧の押に有けるか秀吉公長久手へ押向給ふと見て秀吉公の御陣場より四五町計のすく道纔五百にたらぬ備ソナヘにて少もおくせず長久手へ押返る、家康公の御供して小牧山へ立帰り武勇をあらはす御方今イマ少退て敵を追ものならば秀吉公

のあらずの大軍と出合てつかれたるに勢殊に逃る
敵を追すかうて備エみたれたる所なれば合戦あやう
かるへし、軍勢も早々引あけたり、案のことくに秀吉公
八見方敗軍のよしを聞給ひ青塚より五万騎を引卒メ
急き長久手へ馳向けれとも家康公未発をカンカエ考 早速
小幡の城へ入給へ八手をなくして口惜こそおもわれけれ
去程に小牧山に残る人数八信雄卿の尾張衆と酒井
左衛門尉・石川伯耆守都合一万五千也、其時酒井左衛門尉
申八秀吉公の本陣へちかくと旗をよせ、爰におゐて二

重の塀を押破り敵の陣屋を放火して焼払ふ物なら
八長久手の敵敗軍うたかい有へからず、石川伯耆守にも
早々旗をあけさせ給へと三度に及て使を立けれとも
伯耆守進むにあたわすと齒噉府をなしてとまりぬ
家康公其日に小牧山へ引歸らせ給ふ也、秀吉公も龍泉寺
より青塚へ引歸し給ふ也、明れは十四日秀吉公引取セ
給へ八家康公も信雄卿も同日に清洲江御馬を入給ひ榊原
小平太康政をして小牧にとりめ守しめ給ふ也、六月十四日
蟹江前田与十郎同意にて瀧川左近を引入て敵になる

信雄卿家康公則人数を差向責給へは十日計り持
こらへ叶はずして一益城主前田与十郎が頭を切、和をかふて
城中を舟に乗あさましき躰になり伊勢の国へ落行
たり、夫を家康公信雄卿勢州へ御馬をよせ白子神戸を
放火せ、濱田の城を乗取て清洲へ歸らせ給へ八七月日
秀吉公しのきに城を取て八月尾州ならへ出馬して
下りなからに城を取給ふ 家康公信雄卿三井のしけん
寺に城をかまへ御歸陣也、十月日秀吉公勢州へ出馬
有て陣取給へは 家康公信雄卿桑名迄御出張有

町屋川と言所にて取合足輕セリ合有て爰に
公家衆六条の門住馳クハハ加り給ひて御あつかひ有けれ共
家康公御承引なし、されとも信雄卿和睦仕給ふ上八
家康公を御無事有やしとちかい給へ八御一和調ふ、此
時秀ヤス康十一才上洛奉後石川勝千代伯耆守
次男也本多仙千代
左衛門子
号飛驒守秀吉公養子として羽柴氏をさつけさせ給ふ也
同十三年乙丙家康公四十四の御年に信州小縣郡
真田安房守昌幸か居城上田江御人数を差向ヶ給ふ、先手
北条氏直と御和睦の時急飼の城地を氏真方ハ則切

渡し給故上州沼田の城をも北条殿江相渡へき
とし真田方へ被仰遣処に昌幸請次此沼田領の
儀八家康公を拜領の地ニもあらず、家劔鋒の力を以テ切取
たる所也、其上此度御方申セは御忠節とこそ八存知にふる
家等苦勞して切捕たる地をめしかへされ北条家へ渡し申
さん事いかなる替地也ともまつたく思ひ寄すと申はつて
北條家へ渡さすあまつさへ悪して秀吉公へ申返のよし、大道寺
駿河守来てうつたへ申故に平岩七之助・鳥井彦右衛門・大久保七郎右衛門・
保科禅正父子・諏訪芦田岡部内膳知久・下条大单遠山屋代

越中三枝土佐守并井伊直政各代に家老木俣土作等を初
として都合其勢二万余騎上田辺に押詰陳^{ジン}を取、去程に
八月二日寄手の衆加賀川を押越て上田の城へ押寄る、真田も
城の外へ七八町も是有ん所へ足輕を出し鉄砲をうたせせり
合たり、されとも寄手大勢なれ八是を事共せず、大軍一手に
なつて追立けれ八城下をさして引退く寄手の衆勝に乗て是
を追海野町迄みたれ入、敵城戸口にさゝへて鉄砲をはなちて是
をふせきかためたり、急^レ而^レ合^レ図^レと見へて所々の山々崩^レに伏兵
おこつて旗をあけときを作り弓鉄砲を打立射懸前後左右に

蜂のごとくにおこるに依て寄手の軍勢さ八き立て責口を引
退かんとする処に真田安房守昌幸・同次男源次郎後号再拜を
振て城戸を開き一度にとつと突て出けれ八寄手追立られ廿余
町追崩され二三百騎計うたれたり、平岩七之助・大久保七郎衛門等
宋牌を取て藤の森と言所にてとつて戻し一さゝへ戦けれとも
引立たる御方にきおひかりたる敵也、其上川中嶋右加勢の人
数の二ノ手にすけ来りけれ八夫右悉ク敗軍して加賀川を越岩下
近辺迄大方敗北したり、鳥井彦右衛門手八未崩すして後陣に引
のくに戸石の城右真田源三郎後号松城の城主也、宋拜を取て

伊豆守

松城の城主也、宋拜を取て

染屋ソメの台へ旗を差上ケ先途を取きらんとするに依て敗軍
する敵の手しけくしたひたる其手の軍兵三十騎計川を乗
越へて引退、よし田の台に旗を立敗北の土を集メ備へけれ八諸手
の衆も段々に旗を立たり、真田も川の端迄押寄けれ共川を八
越して黒つほの台に旗を打立て勝鬨を上ケのち引入けれ八寄
手の衆をあい引にしたりける、翌日鞠子の城へ城代海野
三右衛門働あり
真田と又おしむかいて八重原にて相陣に取、足輕セり合有、然るに
真田八其頃次男源次郎を八景勝へ出仕させし故河中嶋衆荒手
にすけ来て二ノ手に備へ扣たり、味方八悉ク討死或八手を負ひ

つかれたり、敗軍の備を以テ守る戦ふにあた八つとて夫々諸将引
取也、同年秀吉公命によつて信雄卿使羽柴下総守勝雄浜
松へ来りて御上洛の事を申、許容なし故に五月十四日秀吉公妹
浜松へ御輿入て家娶の儀有て此時浅野弾正供奉すると也、同
九月秀吉公の母公の大政所三州岡崎へ御下向有て人質となり
給ふ、到井伊兵部少輔・本多作右衛門兩人に預ケ置セ給ひて御上洛有
於大坂の城秀吉公と御対面、同十月家康公中納言に任し給ふ
此時豊後 中納言豊臣之
守秀長 秀次任参議かくて家康公御下向也、後大政所を八井伊兵部少輔
供奉しておくり奉り上洛する、此時秀吉公命に依て直政五臣

の從徒に任ス 号井伊
侍從ト言也 去程に秀吉公石川伯耆守を右八もてなし

給ふといへとも其不儀有をねたんで終に一言も心よき事なし、秀吉

公天情誠有事を人皆感ずる也、其頃井伊直政・本多中務大輔忠勝・

榊原式部大輔康政をして一人も於京都ニ證人 給ふ也、其月廻に

至て家康公浜松ヲ駿河の城に御移徒諸臣等八年越て是にあ

つまる也

同十五年丁亥家康公四十六、秀吉公九州進発の時家康公ヲ使者

本多豊後守廣高をつかハし給ひ九州岩石の城攻の時戦功有

ければ秀吉公感し給ひて羊の革の羽織并金鍔の脇指を本

多豊後守にたまわる

秀吉の聚樂の亭に家康公会志給ふ、同十八日還御

同十七年巳丑家康公四十八、五月日秀吉公配金に其品数有授り家康公へ黄金二千両・銀一万両を十一月日秀吉公入洛井伊直政号供奉る秀吉公と謁見し給ふ也

同十八庚寅家康公四十九、正月十四日南明院殿聚樂におゐて薨

し給ふ四十八歳秀吉公妹家康公の室也同三月秀吉公小田原進発々五十五ヶ国の大

軍を引卒々うき崎ヶ原に陣取て北条美濃守氏親居城

葦山ニラの城江八信雄卿并福嶋・細川・生駒・蒲生・蜂須賀・伊賀侍徒・

筒井定次等を指向給ひて箱根山路を平押におしあけて山中の城を一時に責崩し、其日の内に小田原へ推押る、秀吉公八石垣山に陣をかまへ石垣高ク筑上ケさせ失念せいくら大門たてテ尾をふせしらかへを付少の内に城を取立小田原の城中を目の下に見下シて数万騎の大軍を以テ百重千重に取包城きわまで仕寄て押詰て是を攻ム、家康公是窪を越山中に御陳を取らせ給ふ也、旧井（目）峠へ八利家号加賀大将にて北国勢并信州真田を同勢として押出ル上州松枝の城を責落し大道寺駿河守ニ降参させ、夫より松山・箕輪・前橋・川越・鉢形等の城々責取、八王子の城に至て城主

狩野中山防ぎ戦ふといへとも終に落城する

付其後葦山の城八 玉繩の城主○
内藤三左衛門二明渡ス 忍ノ成田も降参

北条左衛門大夫氏勝降参
する也

扨又関東裏におゐて浅野弾正少弼・梶原某此

家康公方本多中務大輔・平岩七之助

後号
主計頭

・鳥井久右衛門を大将にて

佐倉・土気・東金・南下妻・筑井其外諸城を責寄て討取、北条

十郎氏房

氏直舎弟
号太田

居城武州忍付の城へ押合せて是を責、大手へ八

浅野霜台長政・本多中務忠勝押向、木村常陸助・榊原某此和気へ

向ふ、平岩七之介親吉・鳥井彦右衛門元忠八新城隠居曲輪へむかふて

是を責、城中に八宮城・太田・伊達等下知して爰を最後と防ぎ戦て

大手からめて敵御方討死手負数をしらす鳥居彦右衛門・平岩

七之介八新城を乗取らんと宋拝を振てしきりに押詰／＼責
寄せたり、兵しのきた／＼かふ故其手の者とも討死手負あまた有
去とも鳥井彦右衛門宋拝を取て城を乗越城の堀きわへ
働き押寄猶ナラしきりに是を攻ければ諸軍八是に利を得て
押寄猶々責入程に城守伊達与兵衛降参を請て呼はるれ八
鳥井の旗を立てるより此城を攻ること志急にして防にあた
わす、ねかわく八御しんろう分に城を渡し申さんとして降参するに依て
城を交取五月下旬に海野弾正少弼其城に入也、去程に秀吉公八所々
のた／＼かに城々にて討取たる首共を小田原の城表に懸ならへさせ

見セ給へは城八日々にぞよわりけり、其後家康公の責口本城
篠曲輪を井伊兵部少手の者長野伝蔵・近藤登之介(業美)一番乗し(貞用)
て責破ル方々の持口こらへかたく見へければ松田尾張逆心を企て
敵兵を城中へ引入ンとする処に次男松田左馬之介再三許容する
といへとも尾張用ひされ八左馬之介八制し手ひそかに陣屋を忍
ひ出氏真へ注進申セ八大きふおとろき、尾張父子共に城中にて
成敗也、凡三月下旬より同七月上旬迄日夜セり合たゝかへは城中
の軍兵ことくつかれはて皆退屈しては見へにけり、去程に
氏直八せんかたなくや思ひけん縁有事を幸に家康公の御陣所へ

案内をなし、父氏政并諸卒の助命の事をひたすら頼まれ
けれ八家康公難黙止て秀吉公へ具に申給へは秀吉公承引
有て刻七月八日に城を明ては出られ、兎同十日検使有て左京大夫

氏政^{行年五十三}氏照^{行年五十一}兄弟共に切腹させ給ふ、氏直・氏親・郷・左衛門佐

兄弟四人命を助、高野山に山入仕給ふ、其後氏真世才にして文禄

壬辰十一月四日大坂に下て病死仕給ふ也、北条五代にして断絶する也

去程に秀吉公、家康公の御領内三河・遠江・駿河・甲斐・信濃五ヶ

国にかへて関東八郡を家康公へ進せらるゝ伊豆・相模・武蔵・

上野・下野・上総并常陸兩州の内少入故に八州と宣也、夫方武蔵・江戸

御居城と成、其年則移りかわらせ給ふ故に御譜代の衆大身小身

大かた不残御供する御譜代の先手衆替ル内覚

上州の内

一 高崎 五万石

井伊兵部少輔

上総の内

一 小瀧ノ城 五万石

本多中務大輔

上州の内

一 館林城 五万石

榊原式部大輔

下総の内

一 岩崎城 四万石

鳥井彦右衛門尉

上州の内

後 一 城 二万石

酒井左右衛門尉

武州の内

初 一 岩付城 四万石

平岩七之介後号
主計卜

相州の内

一 小田原城 二万石

大久保七郎右衛門

上州の内

一 白井城 二万石

本多豊後守

上州の内

一 佐貫城

内藤弥次右衛門

一 城門行

内藤三左衛門

一 一万石

植村出羽守

一 一万石

三宅惣右衛門

同十九年辛卯家康公五十の歳、秀次秀吉公甥
号三好中納言大将として奥州

九戸郡発向有、本陳八家康公御出馬有て、忍手次ニ御旗を立

給ふ、此時蒲生氏郷・浅野長政・堀尾吉勝・井伊直政先陣也、九戸

郡修理亮降参、奥州悉ク治りて御馬入也

此時伊達政宗蒲生氏郷
米沢を加賜也

去程に秀吉公猶も秀次公にゆたかなる御代をゆづらせ給ひて御身
八御隠居にて太閤と奉申、是より秀次を当閔白と申也、其年の暮
より当殿下聚楽へ移らせ給ふ也

文禄元年壬辰家康公五十一、二月太閤高麗御陣也、家康公一万
五千余騎を卒々供奉あり、肥州名護屋に御陣を取給ふ也、此時

秀康江千五百・和州秀後^{一万}人・前田利家八千・蒲生氏郷^{二千}・佐竹義宣

千^二・伊達政宗^{千五}百^百・最上義光^千人^千・森忠政^{二千}・丹羽長重^{八百}・木下長^{千五}百^百

凡兵士十万余陣也、御先手衆八小西撰津守行長兵七千・加藤主計頭

清政其勢^万一先陣々其外四国中国九国二崎の大名小名等凡軍兵合

指三万余鮮朝国へ押渡り度々の合戦勝利を得て城々大かた
責落高麗大形和を調ふ

同二年癸巳季冬に至て太閤御帰洛あれは 家康公
も御帰京有渡海軍将等も大方皆帰願すると頭
清正・行長八釜山浦といふ所に滞留なり

同三年甲午 家康公御歳五十三、太閤伏見に城を築
せ給へ八諸候諸臣も又是にあつまる、此時太閤の命ニ
依て高麗釜山浦諸城を守る将達の外ならびに
名護屋に残る諸士各伏見に帰り来る也

同四乙未年 家康公五十四歳の御時、殿下反逆の讒言に依て太閤と 蔵主御使として仰合され
たき事有、早々伏見へ入せ給へとてたはかり出し
それと直スニ高野山へ送り給ひて後生害せさせ給ふ也
此時一柳左近將監を太閤と家康公江預ケさせ給ふ也
慶長元 丙申年 家康公御歳五十五、任内大臣に
給ふ也、是より奉称内府公と

同二丁酉年 家康公御歳五十六、秀吉公命に依テ今度
諸将等朝鮮国へ渡海、清正・行長先陣如所凡軍

勢も又十万余と言也

同三戊戌年 家康公御歳五十七、太閤御病腦大切に成ら

せ給へ八御遺言として 家康公にも三年在伏見仕給
い其後八年中に一度ツ、関東へ御下向有て御休息
あるへし、当七歳の秀頼十五才になる迄八天下の後
見を八 家康公に預置也、其外の諸大名かたく三年
在伏見たるへしとのたまい置て太閤行年六十二
八月十八日に薨死せさ勢給ふ也、かるかゆへに 家康公在伏見
をなしたまい天下の後見として執見を仕給へは石田

を初テ諸臣諸大名一味内返して逆意を企ミヤウ 家康公
大坂へ渡らせ給ふ、議待請て直ニ押寄討取奉らんと
仕ける処を藤堂佐渡守高虎かはからいニて我亭へ招請々無二に
御方申上ル、其内に伏見に在合御譜代衆井伊兵部を先と
して取物も取あえす我もくと馳付色めきければ就え奉る
事あたわすして無恙登城有て伏見へ帰らせ給ふ也、この
年高麗渡海の諸将等帰朝不残伏見に於テ 家康公に
拝謁々各帰国する也、 家康公此時嶋津兵庫頭義弘か
軍功有を感じ給い所領四万石を加へ給ひけるなり

同四巳亥年 家康公御歳五十八於、伏見石田治部少輔棟
梁ニ而諸臣打集て敵御方あらはれ又すてふ事出来
らんとするを井伊兵部少輔聞付て 家康公へ参子細
申上ケ置バ早速向嶋太閤の御茶屋へ御移リ有て塀柵を
付させ兵糧を取込ければ異国の地とぞ見へける
池田三左衛門・羽柴越中守・藤堂和泉守・福嶋左衛門大夫正則・
浅野左京大夫・黒田甲斐守・京極宰相・堀尾帯刀・有馬
中務等を始として各出仕して勤番する、其上関東方
御人数夜に日を續て馳上ければ石田を始として

皆氣をうしないける、去程に秀頼公於八加賀大納言
御供して大坂へ移ウツりたまへは石田・長束其外伏見の
城を家康公に渡し奉り大坂へ下向仕けれ八事故なく
其年も暮にけり

慶長五年庚子家康公五十九の御歳、上杉景勝、石田三成頼む
子細の有に於会津在城して召に応せず、是に依て御進爵の
為家康公関東御下向諸国の大名小名同時に打立馳下ル、急而
賣口の御手分には白川へ八家康公みつから御馬を向給へし、仙
道へ八佐竹義宣・伊達政宗、米沢口へ八最上義元、越後津川口
へ八前田利家等と評定有て家康公六月十六日大坂を御出馬
にて七月二日江城戸のに御着かくて同廿三日小山まで御出陣秀忠

公八一日御先へ打立セ給ひて宇津宮に御陣を取らせ給ふ也
去程に上方ニおゐて石田治部少輔三成、此二年の間家康公
権威をう八んと程々次てを以テねらふといへとも不叶処
に急畧ケイリヤク、此時首尾幸とおもひ立てむほんを起し太閤日
来ヨたく八へ置セ給ふ処の金銀を取出し秀頼公の命として
急而と堂の諸大名はいふんする、其徒の人々八筑前中納言秀秋・
小早川左衛門・備前中納言秀家・浮田八郎・前門府入道常真・
毛利右馬頭輝元・嶋津兵庫頭義弘・土州の長宗我部・大谷
刑部少輔吉継・長束大蔵大夫正家・増田右衛門長盛・小西撰津守

行長・本福寺の住侶・安国寺丹羽五郎左衛門長重・羽柴下総
守勝雄・鍋嶋加賀之守真茂・立花左近将監宗茂・濃州に八
岐阜中納言秀信信長公ノ
長子也・常陸国佐竹次郎義宣後号
右京大夫・信州
真田安房守昌幸等也、其区徒大坂表二而勢を揃へ先伏見の
城へ押寄十重廿重に取登ていきをもつかせず責、城中の
大将鳥井彦右衛門・内藤弥次右衛門及松平主殿頭・同五左衛門等勤たゝ
かい是を防く、去頃家康公深尾清十郎と言者に足輕二百人
預させ給ひて是をも伏見の城に残させ給ふ処にかの清十郎か
足輕に三河以来御譜代の筋目の者として八一人も不置々新参

の寄合足輕成けれ八彼組の足輕一味して逆心の徒党をひ
そかに松の丸へ引入、城方火を過ケ一時に焼立たり、故に八月替
巳の刻に城中軍兵とも切出ことくく討死する、鳥井彦右衛門八
生残りたる手の十四五人左右として二ノ大門を押開き敵押入八
押出し三度に及てたゝかへは郎等不残討死する、彦右衛門八
長刀を杖につき石垣の上に腰をかけ居たる所へ紀伊国の住人
雑賀孫市と名乗まつさきに追て懸寄すれ八鳥井彦右衛門
是にあり首を取てほまれにせよと名乗所へ雑賀孫市走
懸り鎧付て首を取る、其外討死仕たる大将分の首を八

大坂へ渡し京橋口に懸たり、其より手分をして押出す
其頃大津の城には京極宰相高次号若狭守有、龜を柳川侍
從宗茂・鍋嶋加賀守直茂大将にて秀頼馬廻り衆を以テ是
をセむ十日余リ持こらへて城を渡してのく、伊勢口へ八長束
大蔵大輔正家大将として数万余騎発向する、其頃安野津
の城には富田信濃守有てを中国の勢是を責請取たり
松坂の在城古田兵部少輔ものかれさる、其外忍手長嶋今尾
の城にも押を置、海上八九鬼大隅守嘉隆、是をかこむ水口の
城へは長束伊賀守、龜山の城に八岡本下野守、神戸の城には

羽柴下総守をとめて是をまもらしむ、美濃口へ八大手なれ八
大将むかわすして叶しと三成大将にて徒等の大名等出張する

岐阜の城二八秀信居也、犬山城二八
石川備前守居守也

去程に家康公下総の内古山にて三成

逆心を聞せ給ひて大きに驚き、早々古河より御舟にめし夜を

日に継て急き江戸の城へ帰り入せ給ひて各召寄評定有て軍

の御手分有て、先上杉・佐竹押に八三河守秀康号結城
少将也・宇津

宮城主蒲生飛騨守秀行・房州の大守里見安房守忠義

を置せ給ひ、秀忠公号江戸
中納言下に八信州へ押返し真田か城を攻落

し夫方直濃州へ出合せ責給ふへしと被仰て其時供奉の人々

に八本多佐渡守正信・榊原式部大輔康政・大久保相模守忠隣・真田
伊豆守信之・石川玄蕃等を初として都合御勢三万余と云々
切亦家康公御先勢八八月朔日
江府ヲ立福嶋左衛門大輔・池田三左衛門尉・
中村式部少輔・細川越中守・黒田甲斐守・藤堂佐渡守・山内対馬守・
有馬玄蕃・田中兵部少輔・浅野紀伊守・加藤左馬之介等也、去程に
加賀の国二八小松の城主丹羽五郎左衛門・長重大正寺の城主山口玄蕃八
石田三成と一味して家々か居城に立籠ル、同国金沢の城主前田
利家八家康公の御方故城主山口玄蕃元大正寺へ押寄八月
三日責落ス、又丹羽五郎左衛門と利家と浅井繩手にて合戦有て

扱になりしと也、去程に八月廿三日ニ家康公の御先手衆木曾川を押越て岐阜の城を責落して一人も不残討取り大将中納言秀信を生捕て門出よしといさみをなし、江土におゐて得勝利、垂井・赤坂へ押出す、家康公八九月朔日に江戸を立セ給ひて同十一日には尾州清洲江御着翌日岐阜の城へ移らせ給ふ也、此時大正寺の城番に浜松城主堀尾帯刀を家康公被仰付給ふ付相談の儀有に付て三州苅屋の城主水野惣衛門と池鯉鮒江出合居たる処に石田へ心を寄ける加賀井弥八郎来て家康公へ忠節仕度よし偽て言けるを堀尾・水野くつ

るきけれ八水野を加賀井切殺ス、帯刀ぬからず加賀井を八切当ル
水野・堀尾を討来ら八過分の恩賞と約束して三成に頼まれ
乱と也、去程に家康公方信州江向八セ給ふ、秀忠公へ飛脚到
来して櫛の齒を引かかし三成を打たるならば自余の敵八討
に不足早々引払ひ濃州表へおし出給へしと云々、故に秀忠公八
真田に三日御陣とりえて引払ひ押てのほらせ給ふといへとも三成
押寄けれ八関ヶ原終に也、かくて家康公九月十四日大垣の城際迄
御旗をよせさせ給ふ処に敵方物見を出したり、中村式部少輔一氏
手より足輕をかけ物見武者を打立少々せり合有しと云々

明れ八十五日関ヶ原へ押合す敵八大軍御方八小勢なれば家康公も大事に思召、福嶋左衛門大夫正則・池田三左衛門尉輝政・中村式部少輔一氏・加藤左馬之介嘉明・浅野紀伊守幸長先手大将五頭八御譜代の侍大将井伊兵部少輔・本多中務大輔を添て薩摩守忠吉を大将軍として打むかハセ給へは石田八数万騎の軍勢を前後左右に備を立軍門の旗をつよふしてさいはい取てすてに合戦はしまつて互にいれ合天地をひたかし責戦、大谷刑部父子真先かけて討死する、石田の頼きりたる郎等嶋左近もうたれければ御方きほひかゝつて家康公の扇子の御馬印を押出せは筑前

中納言うら切々石田に向て弓鉄砲射打かくれは崩立ては
敗軍する、三成是ヲ見て急而期する八爰なるは家康公にて
おはする八討捕奉れかは手を軍門にさらさん事八武門のほま
れに有らすや、懸れくときいはひを振て乗廻し下知すれ共
崩立たる大軍なれば次第くに敗北する、其時井伊兵部少輔
直政八備を崩し忠吉を御供して敵の真中へかけ入たれは惣勢
一度に大声をあけて押かけたり、爰に嶋津か徒人松浦三兵衛と
名乗て薩摩守殿に打てかゝるを忠吉ひしと切給へは松浦交
なかして以テ開て忠吉の弓手のか八なをてらと切ルされとも

ためしの籠手なれば御手八少そあたりける、忠吉二ノ大刀に
家康公より拝領の(おおさまんじ)大左文字を以テ振り上ケておかみ打に
松浦かわたかみつけよりけさに切て落させ給ひ誠に御働
たぐいなきリそ見へ給ふ、直政八五反計へたたり戦ひしか
妻手の腕をふかくと手を負て引退、此直政と申八遠州
の住人に藤原の朝臣井隼太か末葉ニ而有てと也、井伊万千代
とて家康公御取立の者、当時八薩摩守殿の旧男になし給也
去程に忠吉八馬をも乗放し歩行立になり給ふ処へ直政
家臣江坂と言ものかけよせ我乗たる馬に乗せ奉り伊吹

山迄御供する、大将御手をくたかセ給ふ故諸卒ことくく敵を
追かけく打取たり、去程に徒党の大將三成を八田中兵部少輔・同
田部伝左衛門と言もの江州浅井郡脇坂と言処にて生捕しを
家康公仰には汝^{ナンジ}か父のかたきなれはとて鳥井彦五郎<sup>後号
土佐守</sup>
に預させ給ふ也、同十六日に佐和山へ押寄せ給ひ石田隠岐守・
同空之助城代にて有しを一時に責ころさる、大津の城ニ八水野
日向守忠勝等を指向、後へは折節秋月福原所しばし
さへ終に明渡したり、それ方大津へつかせ給へは小西行長
安国寺をからめとり三成と同車にのせ洛中を引渡ス、見物の

諸人市のはし叱る迄八及シニ拾万騎ニ一大将も今日八かやうになる
事よ知れぬ八人の行末と皆命さゝやきたり、其後三条河
原へ引出し七月朔日三成行年卅八、其外不残律せられけり
三条の橋詰にかけたりけり、其外与党の棟梁等塚田非弑八
其国を召はなされたり、家康公御父子共ニ直に大坂へ御越
有て今度御忠節有衆へ御国割有中にも井伊兵部少輔直政
八度々の忠節御感不斜由、石田か居城佐和山の城并
領地十八万石給ル、御褒美の衆数多有、徒党の諸大名御赦
免の衆も又多し、同六年辛丑家康公六十の御歳、二条堀

川の城御普請有て、次ニ江州彦根の城を諸国の人数にて
つかせ井伊兵部少輔を置給ふ也

同七年壬寅家康公六十一

同八年癸卯家康公六十二、秀頼公を叙内大臣給ひて家康公
征夷大將軍にならせ給ふ、其後秀頼公を秀忠公の御聲
になし給ひ御輿入事也

同九年甲辰 公六十三

同十年乙巳 公六十四

將軍をゆつらせ給ひて公ハそれ方大御所と申奉ル

同十一年丙午 公六十五、武陽江城御普請有也

同十二年丁未 公六十六、駿府の城をつかセ給ふ

同年三月廿八日薩摩守忠吉逝去

同年四月八日越前黄門秀康公卒ス

同十三年戊甲 公六十七

同十四年巳丙 公六十八、秀忠公命ニ依テ尾州名護屋

の

城御普請有也

同十五年庚戌 公六十九

同十六年辛亥 公七十の御歳、御上洛有て於京都秀頼
公

と会盟、同四月二日關東御下向

同十七年壬子 公七十一

同十八年癸丑 公七十二

同十九年甲寅 公七十三、秀頼公大坂におゐて諸牢人を抱給ひ
十万の軍兵をあつめむほんの企有由聞召依之大御所方秀
頼公母堂在江戸なし給ふへし、さもなく八大坂をさらせ給ひて
御国替有へしと宣ひ被遣候へは秀頼公用ひ給八すして

城をかこむ軍兵を用意して偏に籠城の催し也、其節片桐市正諫言をさゝけけれとも取あけ給八す、故に御進発として十月十一日駿府を御出馬有、秀忠公八同廿二日江府より押のほらせ給へ八坂東坂西五畿内中国・北国・九州・出羽・奥州すへて日本国中の大名諸卒打出ければ大御所將軍数万の大軍を引卒々十一月大坂へ押寄給ひ家康公八住吉に陣をかまへさせ給へ八秀忠公八平野に御陣を取、夫より岡山へ押寄せ給ふ、家康公も天王寺江押寄茶旧山を御陣城になし給ふ、去程に諸国の大名小名数万騎の者とも通路をの城中方も人数を出

摂津国河内の堤を切はなち水をたゝへて道路をうたかは
しむ、天満・せんば・野田嶋・幅ヶ城まで出張ス、南の方の寄手
越前少将忠直・加賀少将利常・井伊・藤堂・生駒・蜂須賀・浅野・
鍋嶋・山内・石川等也

酒井左衛門尉・松平丹後守・牧野右馬允・京極・堀尾・真田・上杉・
佐竹等也、北八本多美濃守父子・松平武蔵守・同左衛門督・
有馬・福嶋・等押詰責寄ル、舟手に八九鬼長門守・向井将監・
小濱・千賀等也、舟をでんぼに浮、敵の舟数多乗捕たり、四方の
寄手等責行多抱を以て仕寄を付柵をふり筑山をつきせい

ろうをあけ大筒を打石火矢をはなちかけければ天地震
働^レ堀も櫓もくつるゝことく也、去程に十一月十五日ニ八蜂須賀
阿波守一手を以テ穢多ク取出を乗捕、同廿六日ニ八^シ貴野表江
木村長門守・後藤又兵衛馳出^レ、佐竹と合戦有て佐竹内渋江
内膳を初として三十余討死する、然ル爰に堀尾山城乗勝六
手にして鉄砲をうたせければ敵城内へ入にけり、同廿九日に八
石川主殿伯樂か測にて取合有て石川人数討れけれども
取出八無難とりにけり、極月三日の夜城中^方大野道犬大将ニて
蜂須賀手へ夜討をなす、利なく^レ数十人^討うたれ引入けり

蜂須賀内中村右近を初少々討れけり、稲田九郎兵衛と言
者鎧を合せて敵の首を取、其夜敵引ける道に城の
又八と書たる木札いくつもありけるにそ夜討先手此者也
と知れける、同四日には井伊掃部と越前宰相兩人の先手
の者共不意押詰塀柵を打破り既に乗とらむともみ
合ける内に上意有て引拳たり、此時松平出羽守十五才
にて塀に忌宰相ニ而田口源左衛門と言者手を負な
から敵の鎧をねち取ヌ、井伊先手木俣右京を鎧を合
て手負けり、其外手負死人数を知らず、城中にも七

手の大将長曾我部入道・真田左衛門佐・大野主馬・同ク道犬・
木村豊前・後藤又兵衛・明石掃部等を爰かしこに馳向
て防戦儀に此城八和胡無双の要害討^{ヒッ}必死の士とも
数万たて籠^リり迎も死する命なりと身を捨て^{タヘカ}戦へ八
力責にして八落へしとも見へすしける所に長門守を
先として一万五千余騎紀州へ超泉州岸^{キシ}の和田江
働に付て紀伊の国主浅野但馬守数千騎にて馳合
かしのへにて合戦をとけ但馬守大きに勝利を得て大坂
勢を十二三町付て主馬か先手の伴^{勇士}団右衛門を八但馬守

内上田主水討取是を初として雑兵三百余人の首
を取、大坂勢大和口へも出張々所々放火して焼働り去程
に大御所四月四日駿河を御出陣とて同十八日京都着
セ給へ八將軍八同月十日に江府を御出馬有て同廿一日
に者伏見江ツカ付付此節古田雄部逆意露頭せ為ふ也軍讒古田於東寺門かくて大御所
將軍京都伏見と五月五日御出馬有て星田飯盛に
御陣取有御先手に者藤堂和泉守・井伊掃部平野口
へ押向ふ、敵方に八木村長門守・長宗我部入道を初として七
手組の諸將等平野口へ押出す、同六日木村長門守先陣

にて平野口へ押通八尾の堤を未明に押て若江の江へ
出張ス、其時井伊掃部頭直孝さいはいを取、押懸たり
山口左馬介・佐久間蔵人と名乗テ一陣に進しを直孝
家臣八田と言者山口か首を取、佐久間を八佐々木舎人
首を揚ル、是を軍の初として打合せもみ合ス内に
其手ノ惣大将木村長門守首を八直孝家臣安藤長三郎
討捕りければなしもろてか八諸卒こらゆへき城中着テ
迎入たり、二の手に長宗我部押出す処を藤堂和泉
守押向ひ八尾の堤におゐて付ツうたれつ天地をひゞ

かし責戦フ、藤堂家台藤堂新七・同仁右衛門・同玄蕃ゲンバを初として究竟の兵共数多討れたれとも少もきゝせず手負を乗越しなめきさけんで戦たり、掃部頭直孝八馳散たる手勢をあつめ長宗我部に向ひて旗をすゝめて押向又藤堂家臣渡邊八はるかの後陣にひかへしか無二無三に横合に突入ければ敵足もたまらず崩立て敗軍する、和泉守手の者追懸ヶ／＼数多の首級を得ル、長曾我部からき命たすかりて城の内へ引取たり、大和口八本多美濃守父子・水野日向守・松平下総守・伊達政宗

大将に八越前少将忠輝、道明寺口へ押寄せは敵八後藤又衛門・

大野主馬・真田左衛門佐大将トして押出ス、味方に八水野日向守・松平

下総守両手を以テ押崩シ悉討程に後藤又衛門なかれ矢に当テ

死にけり、同七日ニ八大御所將軍星田飯盛ニ早天に御旗を寄せ

たもふ敵方に八大野主馬・同道犬・木村豊前・明石掃部・真田左衛門佐

也、大将五人越前少将後号越前宰相
法名一白ト・加賀少将松平肥前守
号小松中納言ト・本多出雲守・

酒井左衛門尉・榊原遠江守・和田豊前守其外諸将押向、其時越前少

将忠直宋拜を取て乗出し給へ八舎弟松平伊与守忠昌後号越前
宰相ト・

同出羽守号
少将トを初として其手の軍勢押懸レ八諸軍統て

馳合セ敵味方入乱切先より火を散しきおひかゝつて押崩し悉ク討取たり、大将真田左衛門佐を八越前少将手にて西尾仁左衛門と言もの討捕、御宿勤兵衛を八野本右近討取、其外数百首を取ル、扨又味方ニ八本多出雲守・小笠原兵部大夫秀政・同信濃守忠脩、次ニ御旗本ニて安藤次右衛門・同彦四郎・石川内記等討死する也、去程に口々の寄手いまた責合せさる先に城中方火出て殿中にも尽つき一宇も残らず焼払、煙消硝蔵に火移り天地も同時に崩るゝかとおひたゝしうちのこされたる大勢是におとろき城中へかけ入むとしけれとも内方木戸をとちて入去レハ散々に落行を

あなたこなたへ押詰追かけ、或八生捕首を取、秀頼公八焼残りたる矢倉へ籠らせ給ふ、爰に為使井伊掃部行向秀頼生年廿四、母堂并大蔵江大野修理亮介錯申、矢倉に火を懸ケ焼立て修理亮を初として満野蔵人・速見甲斐守・森豊前守・竹栄友宋長老等を初として自害して御供する秀頼公御台の御事八御命あやうく見へけるをなんなく出給へ八両御所御悦かきりなし、其日に大御所京都へ歸り入セ給へ八秀忠公同九日に大坂を押はらひ伏見へ歸らせ給ふ、去程に今度捨大坂に七人の大将の内長曾我部入道を蜂須賀内

長坂三郎左衛門と言者八幡きんやの里にて搦捕来ルを二条の駒寄にいましめさらして後、頭をはねてけり、大野道犬八大仏にてからめ取、堺をわたし刻堺の入口にはりつけにかゝる、蒔田隼人八水野日向守内河村新八討取、明石掃部八本多出羽守内汀三右衛門と言者討捕と云々、其外大野主馬・仙石宗也等八行方知れず、其後秀頼公の御子也とて八歳になる童子をさかし出し、三条河原にて被誅けり、此度の戦忠の諸大名へ御加増或八御感状下されて皆々国々へそ被帰けり、ゆたかなる御代となる事今より万々歳とめてたし／＼とそ申ける、八月大御所京

都を御出馬有て駿府へ御帰陣なる、其年十月トシに八御鷹野として家康公江府へ御下り被遊候、極月に至御帰りなり
元和二丙辰正月廿二日大御所田中江御鷹狩ニ御出て俄に御違例の御心持とて御帰り被成將軍を初奉り御公達御薬を進させ給といへとも大御所の命に同人間のまよひ目前なり、家すてに七旬にあまり定葉かきり有とて御薬一貼も用ひさせ給すと云々、去程に
勅使下て従一位大政大臣に御昇進、其時御祝儀の配かへの衆井伊掃部頭と酒井下総守と細川越中守忠

奥又鳥井隱岐守忠頼等也、夫より大相国と申奉る將軍江
御遺言に八家死後来年日光へ大権現とあかむへし
当家末代の守護神なるへしと仰せ置せ給ひて行
年七十五歳にて四月十七日午ノ刻に薨去ならせ給也

御自せひ

わかれ行道と八かねてしりなから

こそこの桜のかせをまちつゝ

うれしやとふたゝひさめて一ねむり

うきよの夢八あかつきの空

さきたつもあとにのこるも同じ道

つれぬはかりかわかれなりけり

此歌を御口すさみ給ひしとなん御遺言にまかせ給ひて
久野山へ土像にして東照大権現と奉祢と也、榊原内記八
御家伝の者なれ八神主たるへしと是も御遺言に依て
神織になし給ひし也

同三年丁巳將軍御參宮有けれ八宰相中將其外御一門を
初奉り諸国の大名に名高家の面々奉伝して庭上
庭下に列をなす日光山奉納東照大権現宮と奉祢そ

ありかたかりし御信也、本地薬師となん申奉る

御法名

奉稱 安国院殿大相国贈正一位植蓮社宗誉道和大居士ト